慶應 SFC 学会 （A）研究成果発表（学会発表）

成果報告書

岸本純花（慶應義塾大学 環境情報学部 4 年）

・タイトル：”The Way To Overcome Problems Pointed In Welfare For People With Mental Diseases: Perspectives Of Self Help Group Leaders And Social Workers Inside Japan”
・発表形式：ポスター発表 オンライン
・学会名称：13th International Conference on Health, Wellness, and Society
https://healthandsociety.com/
・参加期間：2023 年 9 月 14 日～2023 年 9 月 15 日
・開催形式：対面・オンラインのハイブリッドでの開催

【研究の概要】
主題：本研究は精神保健福祉の専門家に対するインタビューに基づき、国内の精神保健制度に対する不満及びそれらの制度が当事者のニーズに至らない点を分析する。さらにアンデルセンの福祉レジーム類型(2001)の学派を通じた社会福祉論をもとに、それらの課題の克服方法を提示することに試みる。

背景：まず筆者が精神保健福祉に触れたきっかけは転居に伴う異なる学校環境への適応過程で心身の調子を崩した経験だ。当時の診断名は出ていない。大学入学後、同じような悩みを抱えた学生同士で『一般社団法人 NeBA(Never Be Alone の頭文字)』(以下、”NeBA”とする)を立ち上げ、当該団体にて、精神疾患や発達障害[1]当事者への社会的偏見解消を目的とした活動を行い、当事者会や社会福祉士の活動家自身の体験や活動内容を伺った記事を Web サイトに掲載した。そこで出会った方々は罹患経験のある方が多くを占めていた。精神疾患当事者会の発足者や運用に携わる方々やピアサポーターなど、精神疾患当事者と携わる職務はかつて罹患経験の傾向が高いことが(木村,2016)により指摘されている。これにより、精神疾患患者が社会福祉に求めるニーズがこれらの職域に従事する人物に代表されると筆者は捉える。実際、当活動にて調査した方は偶然全員精神疾患の罹患経験を持っていたため(一般社団法人 NeBA,2021)、当事者意識を持つ専門家の問題認識を問い出したいと考えたことが本研究に取り掛かったきっかけである。

専門家が精神障害福祉制度をどう捉えるかに対して関心を持ったきっかけは、記事作成活動を通じて筆者自身の生活状況を遥か下回る生活状況の実態に触れたことだ。一般就労(障

[1] 精神疾患患者を対象とした諸制度の名称との互換性の都合により、本書類内では「障害」と表記する。

害者枠含む)が困難な障害者が携わる就労継続支援作業所では、時給が最低賃金を遥か下回ることを学んだ。少ない賃金で適切な治療を受けるには家族の経済的な負担も要することが前提だと理解した。NeBA にて取材した専門家らは、現状の制度に関して何かしらの不満を持ち、当事者をこの状況から現状打破させたい思いを抱えていることがわかった。

【研究成果と今後の活用】
この国際学会の発表に提出した筆者の研究内で言及された法律や制度は日本独自のものであるため、補足説明を追記した。そのうえで福祉制度を類型化した学説を元にどの改善点の実現可能性が高いかを述べた。取り上げられたコメントの中でとりわけ参考になったものが存在する。

In most of the countries globally, the appointment and the treatment ratio between the mental health experts and the patients is around 1:50 per day and there is an enormous pressure on mental health experts to provide better services to the patients.
和訳：全世界の大多数の国々において、専門家による治療と患者による受診予約の比率は 1 日あたり 1:50 であり、より質の高いサービスを提供することへ膨大なプレッシャーが治療者にかけられている。

上記のコメントは日本の精神医療の仕組みに集中して調査活動を行っていた筆者へ新たな発見をもたらした。筆者の調査によって得られた発言の一部は日本の精神医療は欧米の先進国と比べ遅れているという趣旨のものが多かったが、具体的にどのレベルに到達しているかが不明瞭であった。しかしながら、医師不足は全世界共通の精神医療福祉において議論されており、医師不足に陥っていない国家は殆ど存在しない。調査者により賛美された他国の制度もこの点において不備があることが発見された。さらに治療期間における事情に目を向けることができ、良い質のケアを提供する前提としてこの発見は本学会参加が不可欠であり新たな発見を得られた。

【謝辞】
今回，13th International Conference on Health, Wellness, and Society への参加費用を援助して下さった SFC 学会に，深く感謝を申し上げます．さらに丁寧なご指導をいただいた小熊英二教授および助言を下さったゼミ生の皆様に深く感謝を申し上げます。

【引用文献】
Gøsta Esping Andersen. 1990. The Three Worlds of Welfare Capitalism. Polity Press
木村 貴大.(2016).精神障害当事者がピアサポーターになる過程 ：A 氏のライフストーリーから見出されるもの．北星学園大学大学院論集 2016.vol.7, p.1-17.